

〔調査報告〕

中国都市部における子育ての特徴に関する調査研究
— 中学生を持つ親を対象として —

付 国偉*

この調査研究の目的は、中国都市部の中学生を持つ親を対象として、母親の就業状況と乳幼期の預け先、子育てのネットワーク、子育て観について調査し、子育ての特徴について考察することである。分析の結果、正規に就業している母親は、子どもが6ヶ月になるまでに80%が、18ヶ月になるまでに94.1%が仕事に復帰した。子どもの預け先について、保育園は49.5%で、実家は40.5%であった。また、お手伝いさんを雇う親は5.0%であった。休日に子どもを連れて、実家や親戚宅を訪ねて、出身家族と密接な関係を保っている親は、64.9%を占めており、育児の知識を親やまわりの人たちから学んだ親は82.5%を占めていることが把握できた。このように中国都市部においては、正規に働く女性たちのうち、大半は出産後も仕事を継続していることが明らかになった。また、出身家族と密接な関係を保ち、援助を受けながら子育てをしていることが把握できた。中国のように、親族との交流が密接であれば、少子化が進行しても育児不安が大きくなることを予防できるのが示唆されたと言える。

キーワード：子育て調査、母親の就業状況、子育てのネットワーク、子育て観、期待する子ども像

I. 問題の所在

1980年代から中国においては、少子化が進み、子育てに変化が生じた。従って、その時代の子育ての特徴を知るため、現在、中学生を持つ親を対象として調査を行った。母親の就業状況、親族との連携、しつけ形成の影響要因、子ども観に焦点をあて、中国の都市部における母親の就業状況と子どもの預け先、子育てのネットワーク、しつけに対する意識、子育て方針についての実態を明らかにする。

1980年代初期からの中国における経済改革開放政策と出産制限の人口政策は、中国社会に大きな変化をもたらした。「一組の夫婦は子どもを一人しか生まない」という「一人っ子政策」の人口政策は、国策として1980年から本格的に起動したのである。「一人っ子政策」が20年以上にわたって厳しく実施されている。2000年の人口センサスの結果によると、中国の都市化率は36.6%、農村での平均家庭人口数は3.65、都市での平均家庭人口数は3.1である。このように、中国では、少子化と核家族化が進んでいる。

1949年の新中国成立後の中国では、都市部に労働年齢内の全員就業の公有制度が実施されていた。年金・医療福祉制度は、家族単位ではな

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

く、個人単位として職場で行われていた。このころから男女共稼ぎが広がっており、公立の保育園以外に、一定数以上の女性従業員が属する企業・事業団体は、自らの女性従業員のために保育園（託児所）の設置を義務付けられた。経済の改革開放後、外資企業への就職、自営業の設立などで、就業形態は多様になった。90年代になると、社会保障制度と就業制度の改革が始まった。年金・医療福祉制度は、職場保障から社会保障に変化したため、就業の自由度が増えている。

長い封建社会を経た中国では、封建社会の家族観念が根強く残っている。中国では、子どもが多いのは家族繁栄の証であり、子どもに家族を繁栄させる責任を負わせてきた。従来の子ども観は年長に対する従順さ、子どもの努力出世、親孝行を強調したものであった（加地、1984）。新中国成立後、労働力を確保するため、一時的に多子政策が推進されたこともあった。子ども観は、封建社会の家族観念に変わって、国家・集団への服従を強調したものになった。経済の改革開放政策の実施とほぼ同時に実施された出産制限の人口政策は、国家が経済発展のために強制的に実施したものである。中国での少子化の過程は、親が自らの家庭の経済状況や子ども観に基づいて取った行為によるものではなく、強制的なものであった。だが、強制的なものとはいえ、子ども観は、少子化が進行する過程で徐々に変化してきたはずである。

家庭構成が、多子家庭から少子家庭、とくに一人っ子家庭、また核家族に移行しつつあるなかで、母親は、仕事と育児との両者をどう選択するのか、また、子育てのネットワークはどのように機能しているか、さらに、90年代に育児の時期を経験してきた親は、子どもに対するし

つけ、子育て方針をどう認識しているのかを検討して、中国都市部において「育児不安」が起きていない原因を探り、中国の子育ての特徴を明らかにしたい。

II. 調査の目的と方法

1. 調査の目的

本調査の目的は、中学生を持つ親を対象として、母親の就業状況と子どもの預け先、子育てのネットワーク、子育て観についての意識を調査した上で、中国都市部における子育ての実態を考察することである。調査対象者となった親は、改革開放以前に子ども時代を過ごし、「社会変容期」である90年代に育児の時期を経験してきた世代の人たちである。調査対象者の出身家庭及び学校教育をめぐる調査対象者の特徴が、彼らの子どもに行う家庭教育にどのような影響を与えるかを把握することも本調査の目的の一つである。

2. 調査方法

(1)調査対象者 黒竜江省佳木斯市（シャムシ）にあるA中学校の2年生の親（112名）と天津市（テンシン）にあるB中学校の2年生の親（65名）である。天津市は中国の4つの直轄市の一つで、人口は600万人である。佳木斯市は、黒竜江省の東部の中心都市で、人口が100万人未満の国有企業が密集する典型的な地方都市である（『中国富力（2000-2001）』により）。

(2)調査手続き 2004年9月、各学校の担任教師を通じて、親が家庭で回答するように生徒に依頼し、数日後、生徒を通じて回収した。有効回収率は佳木斯市のA校で87.5%（112/128）であり、天津市のB学校で85.5%（65/76）である。

表 1 性別

男性（父親）	女性（母親）	合 計
45	132	177
25.4%	75.6%	100%

表 2 年齢

	34歳以下	35-39	40-49	50歳以上	合 計
度 数	6	101	68	2	177
比 率	3.4%	57.1%	38.4%	1.1%	100%

表 3 学歴

	大卒（短大卒）	高校卒	中学卒	合 計
度 数	36	86	55	177
比 率	20.3%	48.6%	31.1%	100%

表 4 職業

		職 業				合 計
		作業員	管理職	自営業	無 職	
親の性別	父	16	15	7	7	45
	母	48	19	22	43	132
合 計		64	34	29	50	177
比 率		36.2%	19.2%	16.4%	28.2%	100%

(3)調査票の構成

- ①属性（質問：1， 2， 3， 4）
- ②母親の就業状況と子どもの預け先（質問：6， 7， 8）
- ③子育てのネットワーク（質問：5， 10）
- ④子ども観，子育ての方針（質問：9， 11， 12）

(4)調査分析

子どもの成長環境は、彼らの成長発達の過程に大きな影響を与えている。子どもを取り巻く家庭環境の差異（親の学歴）が子育てに影響を与えるかを把握することは本調査のもう一つの大きな目的である。親の学歴の違いによる親の子ども観の分析を行っておきたい。

Ⅲ. 調査結果

1. 調査対象者の属性

(1)性別

調査対象者である親について、父親か母親かを指定しなかった。中国では、母親である、父親であるという性別役割を認めないので、父親と母親を分ける必要がないと考えられる。調査対象者の性別割合は表1に示した。

(2)年齢・学歴・職業

調査対象者の年齢，学歴，職業の状況は表2，表3，表4に示した。調査対象者は30代後半から40代に集中している。年齢から調査対象者のほとんどが50年代後半から60年代に生まれていることになる。50年代から60年代は中国人

表5 母親の就業状況

	正規に勤めている	正規に勤めていない	合計
度数	107	70	177
比率	60.5%	39.5%	100%

口の急増期であった。その時期に生まれた調査対象者は、多くが多子家庭の出身者であると考えられる。さらに、調査対象者は、小学校、中学校時代に中国の文化大革命を経験したことになる。彼らは、「文革」後の調整期中・高校を終わっているため、大学へ進学した人は少なかった。

2. 母親の就業状況と子どもの預け先

「お母さんは出産後、いつ仕事を再開しましたか」と「お母さんは仕事に復帰するために、お子さんをどこに預けましたか」という質問項目に基づいて母親の就業状況、子どもの預け先に関して調べた。

(1)親の就業状況

母親の就業状況は表5に示した。表4中の“無職”と表5中の“勤めていない”の項目があるが、中国での“無職”は、日本の無職とは違いがある。中国では、30代から40代で“無職”という場合は、大体三種類がある。一つ目は、正社員として就業した経験が全くなく、アルバイトなどの非正規就業の形で働くことである。二つ目は、自分の店を持たず、自営業者に雇われたり、露天市場で商売したりすることである。三つ目は、以前に勤めたことがあったが、リストラされ、前述の2つの形で働くことである。

統計によると、1990年に中国で20代から40代の女子労働率は90%であった（鄭，1995）。つまり、表5では39.5%を占める母親は正規に就

業していないことを表している。正規就業以外には法律に定める産後休暇制度が適用されないのので、「出産後、母親の仕事への復帰」の設問から外した。

(2)出産後における母親の仕事への復帰時期

出産前に正規に就業していた母親のうち仕事に復帰した割合は表6で示した。中国の女性の産後休暇制度としては、基本的に90日間の産休制度があり、この期間の給与は100%が保証される。政府が推奨する「晩育」（女性が23歳10ヶ月以降に子どもを生む）では、さらに60日間の有給休暇が追加される。法律に定める制度以外に、授乳時期の18ヶ月までの「停薪留職」（給与は支給しないが、職位を保留する）などの企業独自の産後休暇制度も存在する。表6を見ると、有給休暇までに8割の母親が仕事に復帰した。さらに、18ヶ月までに94.1%を占める母親が仕事に復帰した。正規就業する女性に限り、出産前後の就業状況がほとんど変わらないことを表している。

(3)子どもの預け先

子どもの預け先は表7に示した。正規就業する母親をもつ子どもは、3歳になる前に保育園か親の実家に預けられることが多い。その割合はほぼ半々である。調査対象者全体の子どもの預け先は、表8に示した。状況は大体同じである。つまり、正規に就業していない母親の多くも、子どもを保育園や実家に預けて働いてきた

表6 母親の仕事への復帰時期

復帰年月（月）	度 数	有効比率	累積比率
2ヶ月	4	4.0%	4.0%
3ヶ月	21	20.8%	24.8%
4ヶ月	35	34.7%	59.4%
5ヶ月	2	2.0%	61.4%
6ヶ月	20	19.8%	81.2%
12ヶ月	8	7.9%	89.1%
18ヶ月	5	5.0%	94.1%
24ヶ月	2	2.0%	96.0%
36ヶ月	4	4.0%	100%
合 計	101	100%	
無回答	6		

表7 母親の仕事への復帰時期と子ども預け先

復帰年月	保育園	自分の親	お手伝い	その他	合 計
2ヶ月	1	1	1	1	4
3ヶ月	8	12	1		21
4ヶ月	15	15	2	3	35
5ヶ月	1	1			2
6ヶ月	11	8	1		20
12ヶ月	7			1	8
18ヶ月	4	1			5
24ヶ月	2				2
36ヶ月	1	3			4
合 計	50	41	5	5	101
比 率	49.5%	40.5%	5.0%	5.0%	100%

ことがわかる。

3. 子育てのネットワーク

「休日、お子さんを連れて、家族がよく訪ねる場所はどこですか」と「お子さんに対するあなたのしつけの方針は、おもにだれの影響を受けていますか」という質問項目から、子どもに対するしつけの方針の形成と親族との関係について調査した。

(1)子連れで訪ねる場所

子どもを連れて、家族がよく訪ねる場所は、「実家」と「親類宅」を合わせて、64.9%を占めている（表9）。これは調査対象者が出身家族と密接な関係を保っていることを示している。

(2)子どものしつけに影響を与える要因

子どものしつけに影響を与える要因は、「親からの影響」が最も多く、25.7%で、他の家族、

表8 子どもの預け先

	子どもの預け先				
	保育園	自分の親	お手伝い	その他	合計
度数	74	75	6	20	175
比率	42.3%	42.3%	3.4%	12.0%	100%

表9 よく訪ねる場所

訪ねる場所	度数	比率
買い物	31	17.5%
公園（遊園地）	30	16.9%
実家	79	44.6%
親類宅	36	20.3%
あまり出かけない	1	0.6%
合計	177	100%

表10 しつけ形成の影響要因（複数回答）

	度数	比率	
親からの影響	86	25.7%	人からの影響：82.5%
配偶者	28	8.4%	
その他の家族成員	18	5.4%	
保育園の先生	59	17.6%	
友人	33	9.9%	
まわりの人	52	15.5%	
新聞・雑誌・本	34	10.1%	マスコミの影響：11.5%
ラジオ・テレビ	5	1.5%	
その他	15	4.5%	原因不明：6%
根拠なし	5	1.5%	
合計	335	100%	

友人やまわりの人からの影響が82.5%を占める。さらにマスコミの影響が11.6%、原因不明が6%となっている（表10）。このようにしつけの方針の形成は、出身家族の影響が一番大きい。友人以外のまわりの人としては、職場の同僚が考えられる。つまり、育児の先輩から何かのアドバイスを受けたり、相談に乗ってもらったりという場合が多いことが伺える。

4. 子育て観

「お子さんは、どういう子どもであってほしいと思いますか」「お子さんが、あなたのしつけの方針と違ったことをしているとき、あなたはどんな気持ちになりますか」「お子さんは、あなたの気持ちがよく理解できていますか」という質問項目で調査対象者の理想の子ども像、しつけ観、親子関係を調べてみた。

表11 理想の子ども像

重要なもの	順1	順2	順3	順1の比率
従順で素直な子	46	12	11	26.0%
人に好かれる子	9	17	29	5.1%
自分で考えて行動する子	57	38	20	32.2%
勤勉な子	55	67	12	31.1%
人に対し親切な子	4	7	60	2.3%
合計	171	141	132	96.6%
無回答	6	36	45	

表12 親のしつけに子どもが反した時、親の行動

	度数	有効比率
絶対に許せない	28	16.3%
黙ってられない	15	8.7%
一応気持ちを抑える	114	66.3%
あきらめる	2	1.2%
自分の方針にこだわらない	6	3.5%
その他	7	4.1%
合計	172	100%
無回答	5	

(1)理想の子ども像 「どういふお子さんであってほしいと思いますか」といふ問いの答えは、重要なものから順に表11に示した。回答から見ると、①順2 (36/177), 順3 (45/177) の無回答は順1 (6/177) よりかなり多い。順2, 順3を回答しなかった親には、期待する子ども像が一つしかないと考えられる。②順1で「従順で素直」「自分で考えて行動する」「勤勉」といふ選択はほぼ3分の1ずつを占めている。一方、③順3で「人に好かれる」「人に対して親切」といふ選択は順1での選択により著しく増えてきた。①と③は互い相対する考えであろう。つまり、とりえず厳しい競争社会の中で勝ち抜くために社会への適応能力を身につけてほしいといふ親の気持ちが表れている。

(2)しつけ親 子どもが親のしつけ方針に反する行動を取ったとき、親がどんな気持ちができるかは表12に示した。「絶対に許せない」の16.3%と「黙ってられない」の8.7%を合わせて25.0%を占めた。「あきらめる」(1.2%)と「自分の方針にこだわらない」(3.5%)を選んだ親は少なかった。このことから、親が子どもを自分の思い通りに育てたいと願っていることが伺える。

(3)子どものしつけをめぐる親子関係の理解

「お子さんは、あなたの気持ちがよく理解できていますか」といふ設問の結果を表13に示した。「よく理解できている」「大体理解できている」と「場合による」を合わせて、子どもが親のしつけ方針を理解していると思っている親は

表13 「子どもは、親の気持ちがよく理解できていますか」

	度数	有効比率	累積比率
よく理解できている	15	8.8%	8.8%
大体理解できている	41	24.0%	32.8%
場合による	105	61.4%	9.2%
あまり理解できていない	7	4.1%	98.3%
全く理解できていない	3	1.8%	100%
合計	171	100%	
無回答	6		

表14 子ども像の重要なもの順と親の学歴とのクロス表

	重要なものから順1					
	従順で素直	人に好かれる	自分で考えて行動	勤勉	人に対して親切	合計
大学卒 (短大)	度数 3 比率 8.3%	0 0%	18 50%	15 41.7%	0 0%	36 100%
高校卒	21 25%	4 4.8%	25 30%	32 37.8%	2 2.4%	84 100%
中学卒	22 43.1%	5 4.8%	14 27.4%	8 15.8%	2 3.9%	51 100%
合計	46 24.9%	9 5.3%	57 33.3%	55 32.2%	4 2.3%	171 100%

94.2%を占める。つまり、多くの親は、子どもが自分の子育てのやり方を理解していると思っていることがわかった。

(4)親の学歴による理想の子ども像

「お子さんは、どういう子どもであってほしいと思いますか」という回答と親の学歴とのクロス表を表14に示した。学歴ごとに見ると、大学卒（短大卒）の親の回答は、5つの選択肢の中で、「自分で考えて行動」と「勤勉」という2つの選択肢に集中している。この親たちは、自分の人生経験から自分の子どもに対して競争社会への適応能力を身につけること重視している。高校卒の親は「従順で素直」「自分で考え

て行動」「勤勉」という3つの選択肢がほぼ3分の1ずつを占めている。中学卒の親では「従順で素直」という選択肢が一番多く、43.1%を占めている。

選択肢ごとに見ると、「従順で素直」が占める比率は、学歴の高い順に減少の傾向を示した。一方、「自分で考えて行動」と「勤勉」が占める比率は、学歴の高い順に増大の傾向を示した。

IV. 結論

1. 母親の就業状況と子どもの預け先

60.5%を占める母親は正規に就業していた。

正規に就業する母親は産後休暇後から6ヶ月までに8割が仕事に復帰した。さらに、授乳時期の18ヶ月までに94.1%が仕事に復帰した。子どもの預け先について、保育園を利用する親は49.5%で、実家に預ける親は40.5%であった。全体的に見ても、保育園と実家に預けていた親はそれぞれ42.2%と43.3%であった。このことから、正規に就業していない親の多くも、子どもを保育園と実家に預けて働いてきたことが把握できた。

2. 子育てのネットワーク

女性（母親）が就業するための子どもの預け先として、保育園と実家の2つの選択肢が存在している。64.9%を占める親が出身家族と密接な連携を保っていることから実家で親や兄弟から育児の知識を習得する機会もあることが伺えた。子どもに対するしつけを親や保育士をはじめ、まわりの人たちから学んだが、出版物、テレビなどのマスコミの影響は少なかった傾向が見られた。

3. 子育て観

親の学歴の違いにより、理想の子ども像に関しても違う傾向が見られた。親のしつけ方針に反する子どもの行動について、66.3%を占める親は「一応気持ちを抑える」という行動を取る。一方、25.0%を占める親は「絶対に許せない」「黙ってられない」と感じる。子どもに対するしつけ方針をあきらめたり、こだわらないという考えをもつ親は4.7%と少なかった。また、94.2%を占める親は、子どもが親のしつけ方針を理解していると考えている。

V. 考察

今回調査を行った中国都市部における正規に就業する女性は、出産後も働き続ける割合が高い。そのため、子どもは、6ヶ月遅くでも18ヶ月から母親と離れて保育園や親の実家に預けられる。多くの親は、休日に子どもを連れて、実家や親戚宅を訪ねて、出身家族と密接な関係を保っている。子どもは、その中で対人関係を学ぶ機会を得ている。親が育児の知識を親やまわりの人たちから学んでおり、人から経験の伝達が行なわれている。一方、出版物、テレビなどのマスコミの影響は少ないという傾向はまだ強く残っている。

多くの親は、親子の間に相互理解があると考えていることが伺えた。しかし、親子関係には、親が子どもを親の思い通りに育てたい、子どもの異議を容認できないという従来の「家長中心」の思想が残っている。つまり、子どもが家族繁栄の責任を負ってきたという中国の従来の子ども観がまだ存在している。

このように、中国都市部における正規に就業する女性の多くは、出産後も働き続けており、子育ての援助に関しては、親の実家が大きな役割を果たしている。今回の調査では、日本との比較は行わなかったが、落合が実施したアジアの5地域と日本との比較調査の結果は本調査と一致するところも多かった（落合，2004）。例えば、落合は、「中国での出産・育児と仕事との両立は、柔軟な夫婦間の役割分担（状況対応的分担）と親族ネットワークによるインフォーマルな援助、および育児休業や保育園などのフォーマルな援助の双方によって支えられている」と「アジア諸地域と比較すると、日本では

親族、家事労働者、夫のいずれからも効果的な援助を得られないため、育児の担い手が母親だけにほぼ限定され、就業の機会を奪われるばかりか、孤立して育児不安に陥るのである」と指摘した。このように、親族の支えが乏しい場合、育児不安が高まるという報告は多い。逆に中国のように、親族との交流が密接であれば、少子化が進行してもその弊害が大きくなることを予防できるのが示唆されたと言えよう。

しかし、中国においても、今後、親族によるサポートだけでなく、社会的な育児援助の必要性が高まっていくと思われる。今後の課題として、1980年代以降に生まれている親を対象にして子育てについて調査を行い、時代の変化による差が見られるかどうかを比較検討してみたい。

引用文献)

加地 伸行『世界子どもの歴史(9) 中国』第一法規出

版株式会社, 1984。

落合 恵美子『変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダー』教育研究, 第71巻, 2004。

鄭 曉瑛(編)『中国女性人口問題と発展』北京大学出版局, 1995。

(株)総研(編)『中国富力(2000-2001)』かんき出版, 2000。

参考文献)

垣内 国光『子育て支援の現在』ミネルヴァ書房, 2002。

恒吉 僚子『育児の国際比較』日本放送出版協会, 1997。

落合 恵美子『21世紀家族へ』有斐閣選書, 1994。

若林 敬子『中国人口超大国のゆくえ』岩波新書, 1994。

中国科学院心理研究所(編)『第1次未成人現状調査報告』北方交通大学出版社, 2001。

趙 忠心『家庭教育学』人民教育出版社, 2001。

調 査 票

この調査は、大学院生の論文のため、親子関係の研究の参考にするものです。お子さんの学校に依頼して、この調査票を持ち帰られるお子さんを通じて、あなたのご経験を伺いたと思います。よろしく願いいたします。

なおこの調査は、学術研究ですので、記名の必要がなく、お宅とお子さんの学校でのことにご迷惑をかけるようなことは絶対にありませんので、どうぞありのままにお答え下さい。

1・属性

Q 1・性別

- 1・女性 2・男性

Q 2・あなたは、今、何歳ですか。

- 1・34歳以下 2・35-39歳 3・40-49歳 4・50歳以上

Q 3・あなたは、なにかお仕事をなさっていますか、この中からお答え下さい。

- 1・勤め（作業員） 2・勤め（管理職） 3・自営業 4・無職

Q 4・あなたの学歴を聞かせてください。

- 1・大学卒（短大卒） 2・高校卒 3・中学校卒及び以下

2・育児の体験

Q 5・休日、家族でお子さんを連れて、よく訪ねる場所はどこですか。

- 1・買い物 2・公園（遊園地） 3・実家 4・親類宅（ ）

Q 6・お母さんのことについて、教えてください。

お子さんが生まれてから、いつ仕事を再開しましたか。

- 1・出産後： 年 月 2・仕事をしなかった

Q 7・仕事に復帰するために、お子さんをどこに預けられましたか。

- 1・保育園 2・自分の親 3・お手伝い 4・その他（ ）

Q 8・お子さんは、保育園に入ったことがありますか。

- 1・はい 2・いいえ

Q 8 a・「いいえ」と答えた方、入れなかった理由は何ですか。

Q 8 b・「はい」と答えた方、以下の質問にお答え下さい。

C1・お子さんは 歳 月から保育園に入園しました。

C2・入園するために、事前に何か準備しましたか。

- 1・ご飯を食べる訓練 2・排尿、排便の訓練
3・衣服を脱着する訓練 4・言葉の訓練

5・その他（ ） 6・別に何もなかった。

C 3・お子さんを保育園に入れられた理由は（自由に書く）

C 4・入園する前後、著しい変化はありましたか、それはなにですか

1・いいえ 2・はい（ ）

Q 9・お子さんは、どういう子どもであってほしいと思いますか、あなたの気持ちに一番近いものを選んでください。

1・従順で素直な子 2・人に好かれる子 3・自分で考えて行動する子

4・勤勉な子 5・人に対して親切な子

（重要なものから順に）選んで下さい。第1・ 第2・ 第3

Q10・お子さんに対するあなたのしつけの方針は、おもにだれの影響をうけていますか。

1・親からの影響 2・配偶者 3・その他の家族員（ ）

4・お子さんの学校の先生 5・友人 6・まわりの人

7・新聞・雑誌・本 8・ラジオ・テレビ 9・その他

10・別に根拠はない 11・しつけなし

Q11・お子さんが、あなたのしつけの方針と違ったことをしているとき、あなたは、どんな気持ちになりますか。

1・絶対に許せない

2・ともかく黙って知らない

3・一応自分の気持ちを抑えて考えたいと思う（抵抗感）

4・やむをえずあきらめる

5・自分の方針にそうこだわらない、大して気にしない

6・その他（ ）

Q12・お子さんは、あなたの気持ちがよく理解できていますか、よく理解できていませんか。

1・よく理解できている 2・だいたい理解できている

3・どちらともいえない、場合による 4・あまり理解できていない

5・まったく理解できていない

質問は以上です、ご協力ありがとうございました。

A Survey of Child
— Rearing situation in the towns of China —

FU Guowei *

Abstract: The purpose of the present study to examine that the child-rearing situation including of mother's employment, the network of child-rearing, the children care when their mothers have their job, child-training and hope to their children. A total of 177 parents with children in junior high school completed a questionnaire. Results suggested that ① 94.1% of the mothers who were employed as regular members returned their old position before their infants were 18 months-old. ② their infants were left out nursery schools (49.5%) and with their grandparents (40.5%) when their mothers went to their work. ③ 64.9% of the parents always went to their born-family with their children in their vacations. ④ 82.5% of parents have been learned the knowledge of child-rearing from their parents and the persons who they contact everyday. These suggested that many women in the towns of China would leave their children in the care of nursery schools and their parents in order to continue their employment.

Keywords: survey of child-rearing, network of child-rearing, child-training, hope to child

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University